

『医療の使命 & 医師の使命 ～ 内原性 & 外原性 ～』

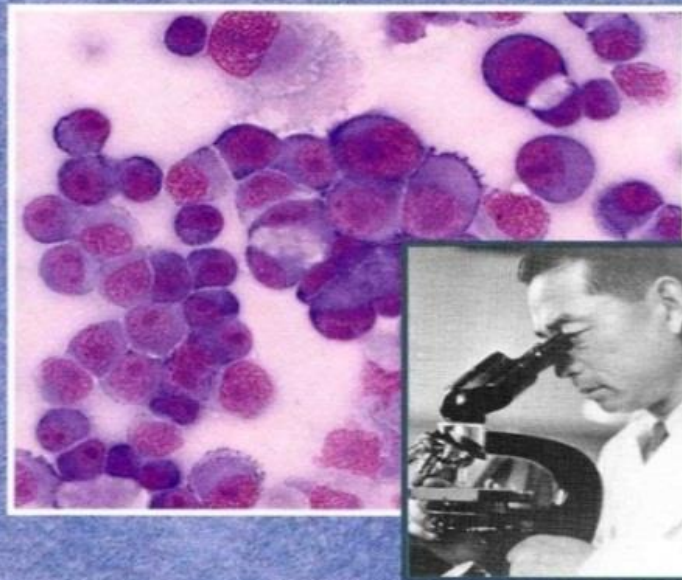
2023 年 1 月 25 日 第 530 回新渡戸グローバル CPC（新渡戸記念中野総合病院）である。病理学者として日々勉強である。2023 年 1 月 27 日は『吉田富三（1903-1973）記念福島がん哲学外来（福島県立医科大学附属病院がん相談支援センター）』である（画像）。【福島県出身の世界的病理学者吉田富三博士を記念して、博士の孫弟子である樋野興夫先生が「福島がん哲学外来」を開設しました。がんと共に生きる患者/ご家族の思いや悩みをともに考える“心の診察室”です。】と紹介されている。筆者は、癌研時代【吉田富三～自分のオリジナルで流行をつくれ～『顕微鏡を考える道具に使った最初の思想家』&『顕微鏡でみた癌細胞の映像に裏打ちされた「哲学」』&『がん細胞で起こることは人間社会でも起こる＝がん哲学』&『事に当たっては、考え抜いて日本の持つパワーを十分に発揮して大きな仕事をされた』】と学んだものである。筆者の原点でもある。

吉田富三は、1972 年の第 27 回国立病院療養所総合医学会総会での特別講演『医学の使命』で、【近ごろ、総論的議論と各論的議論とを はつきり分ける弁論が、一つの傾向の様であります。— 総論的には結構なことで、反対の理由はないから、誰も賛成であります。— 医学の使命といふやうな、甚だ総論的な捉へ方に、同じやうに、各論的、即ち現実的に捉へると甚だしく姿の違つたものが出て来る所があると思ひます。さうしますと、医学よりは使命の方に重点のある問題になりますが、使命が問題になりますのは、医学が実践に移される時であります。相手のない所に使命はないからです。つまり医学の実践者たる医師が、医療行為を営む時に、医師の対社会的使命といふものがそこに生じます。その使命の内容とか、その限界とかが、現実の問題となるわけであります。— 近年は「医療」といふ言ひ方が 広く行はれて居ります。これは医学より実質的な言葉ですから、医療の使命といつても具体性はありますが、医師の使命といふ方が更に実体的になると思ひます。医師には、他の種々なる職種の職業人とは異つた、何か特別な使命があるのか。あれば、それは何に由来するのか。それは医療行為その者に内原性の使命なのか、それとも、医師に対して社会から特別に課せられる外原性の使命なのか。等々、何れにしても、医師とその職業たる医業とに密着して、迫つて来る現実問題になります。】と述べている。現代にも生きる言葉である。

# 日本の科学者 吉田富三

生誕100年記念

北川知行・樋野興夫 編



## 「吉田富三記念 がん哲学外来」モットーの5か条

- 1) 『「嫌」とは、言わない人物』の実践
- 2) 「ほっとけ、気にするな!」の実践
- 3) 「あなたの行かれる所に 私も行きます」の実践
- 4) 『「あれも、これも」でなく「これしかない」』の実践
- 5) 「謙遜と大胆」の実践



がん哲学外来理事長  
樋野 興夫 先生

